

かぐらおが

第 58 号

昭和63年12月10日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は初代学長 山田守英氏)



初冬の大雪連峰

旧きものと新しきもの……………東 匡伸……………2	昭和63年度通学方法・居住状況調査結果一覧…6
チャールズ河畔での1年間……飛世 克之……………3	研究室紹介(解剖学第二講座)……………7
新任教官紹介 牧野勲教授就任によせて……小野寺壮吉……………4	体育大会……………7
教授就任にあたって……………牧野 勲……………4	解剖体慰霊式……………7
田中剛先生の赴任によせて……岡田 雅勝……………5	新人生研修(第2回目)……………8
助教授就任にあたって……………田中 剛……………5	窓 外……………山村晃太郎……………8



旧きものと新きもの

東 匡 伸

数ヶ月前の北海道新聞社会欄に、某市の大正建築が取り壊され、高層ビルディングに変貌するとの記事が載っていた。記憶されている方も多いと思う。記事の見出しが“またまた取り壊し”となっていたように、最近是全国各地でこのような事態が起っている。市民の反応も千差万別であったと想像する。大方は、“仕方がない”であったろうか。坂本勝比古氏が、“歴史と美のランドマーク”という論説を書かれている。歴史的遺産を、その地域の“ランドマーク”として大切にす美的感覚が、現代には欠けている点を強調された論説であった。建築物——その時代時代に生活を営む人間の活動の場、安息の場、社交の場と、それぞれ異なる目的を持つものであるが、その時代の人と共に呼吸をした建物を、新しい時代の阻げと捉えるか、発展の礎と捉えるかは、またその人の生い立ちの差、考え方の差となっていよう。

今春4月より3ヶ月間、欧米へ出張する機会を得た。その最初に訪れた先は、米国バージニア州のウィリアムスバーグという小さな町である。ここで開催された抗ウイルス剤に関する国際会議に出席したのであるが、硬いことは扱っていて、町（富良野市ぐらい）の約半に、17～18世紀の開拓時代の街並みを大切に保存している美しい町であった。1693年に、英国のウィリアム三世とマリー二世女王の許しを得て創られたCollege of William and Maryの広大なキャンパスが町の中央に位置し、1695年から1723年に建てられたレンガ造りと石造りの建物が、今なお使われていた。建物そのものは決してきらびやかなものではないが、300年の歴史が感じられる建物である。アメリカ人は、国の歴史が浅いことによるのか、開拓の野望を懐いて渡ってきた開拓者の末裔であることによるのか、古い時代の建物を温存するのに熱心である。このようなold colonyがあらこちらにあり、発展への精神的拠り所としていることが強く感じられる。

英国。ロンドンの古い街並みの美しさについては、多くの紹介があるので省くとして、村々に散在する教会の殆んどが、尖塔ではなく城壁の見張り塔と同様の石造りの塔をもち、黒っぽく、暗く、しかし平坦な丘陵に小さいながらどっしりと落ちていて、これまた古い石造り、レンガ造りの農家と融け合っている風情は、英国的なものの最たるものである。友人のBurke教授は600年以上の歴史を持つものばかりであると自慢し、一つの廃れた教会（牧師が少ないために、掛け持ち教会を少なくした結果生じた教会）に私を案内し、あと何百年は手を入れることなく、このまま存続するであろうと述べていた。英国人の頑固さと保守主義——“長年の経験で、このままで良いと解っているものを変える必要はない”という

民族性が強く感じられた。但し、このように書くと、英国人に対して誤解を招く恐れがあるので、注釈を加えるなら、Burke教授の大学、研究室、或いは、友人Skehel博士が所長をしていて、私の教室の錫谷助手が明春早々に行くことになっている、ロンドン郊外ミル・ヒルにあるNational Institute for Medical Researchは最新の研究設備で満ちているし、本年度のノーベル医学生理学賞受賞者2人を出して有名な、米国 Wellcome Research Laboratoriesの本拠である英国研究所は、建物は貧弱ながらも、その内容は頑固さ、保守主義とは裏腹である。英国人の徹底した節約主義と合理主義であろうし、ナショナル・トラストを生み出したよい意味での伝統主義であろう。

スウェーデン。ストックホルムは美しい街である。隣国フィンランドのヘルシンキが、バルト海の乙女 (daughter of the Baltic) と呼ばれているが、私にはストックホルムがその呼び名に、より相応しいと思う。船上から眺める王宮と教会、入江の丘に点在する民家の白壁やワインレッドの壁と樹々の緑との調和は美しい。しかし、ここで思わぬ事実と遭遇して驚いた。17世紀の荘厳なバロック風王宮の内に入った時、柱や壁が大理石と思いきや、大理石様に彩色されたものであったからである。現王の居城である郊外のドロットニングホルム宮殿も、フランスなどの旧王宮と異なり、外壁には飾り彫刻もなく、内部の柱も大理石様彩色柱という、誠に質素なものであった。福祉国家として名高いスウェーデンの質実さには、唯々敬服した。このように、建物には、そこに生活する人々の息遣いが染み込んでいる。その国、その地方の民族性が息づいている。

米国、欧州、北欧を巡って、日本を振り返ると、最近は、民族性の乏しい、奇を衒う(?)近代建築が増え、古い遺産が、明治村、北海道開拓の村に押し遣られ、真のランドマークが失われていることを痛感する。限りなく残念に思うのは大方の感慨であろうし、経済効率のみを追って精神的破綻に結びつくことも、誰も疑わないところであろう。旧きものが辿った歴史、先人の歩んだ足跡を如何に咀嚼し、現代における発展に結びつけるかは、すべての分野で常に検討されなければならない問題である。

翻って、旭川医科大学は創立15年を過ぎんとしていたが、まだまだ若い大学である。やっとな中堅が本学卒業生で占められつつあり、誠に喜ばしいことである。よい意味での伝統が創られつつある。ここで、一年一年生まれる旧きものの中に発展の礎を見出し、軽率な先走りをすることなく、本大学が将来、医学発展のランドマークにならんことを願うものであり、努力せんと思う昨今である。

(細菌学講座 教授)



チャールズ河畔での1年間

飛世克之

チャールズ川というのは Charles River の日本語訳のつもりである。この川は Boston と Cambridge の境界線になっているとともに、大ボストン市の景観に役かっている。北国の短い春のあと夏ともなると河畔では、jogging や日光浴の若者で賑わう。私が研究生生活を送っていた Massachusetts General Hospital (MGH) もちょうどこの Charles River の河口付近にあり、1821年の創設頃はこの川が唯一の交通路で、患者さんも帆掛け船を利用して来院していたらしい。私が滞在していたアパートはMGHの目と鼻の距離であり、Charles Riverの四季の変化とともに過ごした。私が research fellow としていっていたのは MGH の Cardiac Unit だが、その構成は講座制とは異なっていて、およそ15の Laboratory (Labo) から成る大世帯である。そのうちの1つ Cellular and Molecular Research Laboratories というところで1年間過ごした。そこの Labo のテーマは “Abrenergic Receptor and G protein” であり、Molecular Biology の立場から研究を推進している。私のいただいたテーマも G 蛋白の特異的抗体を作ることであり、この抗体の作製により免疫学的手法で細胞膜分画の G 蛋白の量を同定しえるようになる。直接の指導には Charles J. Homey 博士が当たってくれた。この Charles という名前は、Charles River の Charles と同じであり、どうもこの名前はついてまわっているようである。Charles は愛称として Charley または Charlie と呼ぶ慣例であり、日本では上司を名前で呼ぶことはまずないと思うが、郷に入りては郷にしたがえ、私もほかの仲間と同じように愛称で呼ばさせていただいた。彼らとともに研究をして特に感心したのは、実験結果に対する真摯な態度であり、思うような結果が得られないときでもまず discussion を大事にし、その結果が実験過程のまずさからきたのかまたは何か新しい物質によって引き起こされたかについて1日以上かけて話すこともまれではなかった。このような事を通して研究全体を少しずつ構築し展望していこうとする姿勢には学ぶところが多かった。私のいた Labo では私を含めて5人の M. D. と11人の Ph. D. より成り、カラムの作製法、測定機器や RI の扱い方など多くの基礎的な手技については主に Ph. D. の方から教えていただいた。Labo には外国人としては私のほかに、韓国、ドイツ、南アフリカから研究にきていたが、ほかの Labo に比べて米国人が多く、いつも笑い声がたえない陽気な Labo でもあった。Ph.

D. の方は薬学と生化学の出身が多く、Labo の大きな力となっていたように思う。Ph. D. といえば MGH の対岸、Cambridge には Massachusetts Institute of Technology (MIT) があり、そのなかの遺伝子工学部門は世界の最先端をいく。MGH を含めた Harvard 大学の関連病院の各 Labo は、研究の方向や方法論的に MIT から大きな影響を受けているのではないかと考えている。このような環境のせいか、医学において臨床とか基礎という分け方は多分便宜的なものであって、生体を構成している細胞レベルまで考えると、その基本的な代謝の過程は本質的には同じであるということに常々思うようになった。しかし、どのようにして臓器特異性が発現してくるかについては、多分詳細な遺伝発生の知識が必要になるのであろうと思っている。MGH には10人前後の日本人研究者がいたように思うが、ボストン市内の Harvard 大学の関連病院にはあわせて多分20~30人の日本人研究者がおり、月に1~2回個人の研究発表の集い（歴史があり10年以上も前から続いているらしい）が開かれており、私も1度発表の機会をもった。もちろん、ボストンでの生活や研究などの情報交換の場でもあったが、病理や生化学、また外科系など他の分野の多くの人々と主に研究面でざっくばらんに話しあえた。もちろん、Labo などでも親しい友となりえたアメリカ、ドイツ、イタリア、中国、韓国人とも息の長いつきあいにしたいと思っている。このように多くの異分野の人々と自由に話しあえることは、研究を進める上で役にたつばかりでなく研究上のヒントもえられる事が多い。特に話が細胞の膜特性や代謝のレベルにまで至ると対象とする各臓器特異性からくる差は少なくなり、人々に共通の話題が出現してくると思っている。大学の中でも出来るだけこのような視点から物事を考えたいと思っているし、ざっくばらんなセミナーがあってもいいとも思う。このようなセミナーではいわゆる医学の常識をくつがえす驚くような仮説を聞くのを目的として、大学内外の話題提供者を中心に開く。そして、人々の驚いた程度をその話題の評価の尺度とするというような余裕も持っていたい。いずれにせよ、チャールズ河畔で学んだことの1つは discussion の重要さであり、これから大いに実践していく必要性を感じている今日この頃である。

(内科学第一講座 助教授)

新任教官紹介

昭和63年8月1日付けでドイツ語に田中助教が、8月16日付けで内科学第二講座に牧野教授が就任されました。

お二人は、すでに教育・研究等に当たられておりますが、本誌では身近な方からの紹介と、御本人からの挨拶をいただきました。

(学生課)

牧野勲教授就任によせて

内科学第一講座 教授

小野寺 壮 吉

内科学第二講座の主任として、牧野勲教授には去る8月着任されました。旭川医大が、基礎造りの時期を経て、限らない充実と発展を目指して年々その活動性を高めつつある今日、牧野教授のような温厚熟達之士をお迎えできたのは、まことに喜びに堪えないところです。石井前教授御退任の後暫くの間兼担を命ぜられていた御縁もあり、先生の御紹介を兼ねてお慶び申し上げたいと存じます。

牧野教授は、北海道大学医学部を昭和37年に御卒業、インターン修了後同大学大学院医学研究科に進まれ、医学部内科学第二講座で当時の真下啓明教授の指導を受けられ、併せて同医学部生化学第二講座の今井陽教授から胆汁酸代謝の研究の指導にあずかったと伺っております。昭和42年大学院課程を終えられ、昭和44年にはスウェーデン王立カロリンスカ医学研究所生化学部門に留学され、2年近い歳月を専ら胆汁酸の代謝・測定に関する研究を続けられ、当時、先生が大変良い仕事をなすってこられたと聞き及んでおりました。御帰国後も引き続き、胆汁酸の免疫学的測定法の確立、胆石症の病態解明、その治療など、関係領域の仕事が次々と手がけられ、今日この方面の研究の第一人者と伺っております。

昭和56年、北海道大学講師に御昇任、同年弘前大学医学部第三内科武部和夫教授のもとへ助教として赴任されました。それ以来、内分泌、糖尿病、感染症、神経疾患等の診療・研究の指導と、御専門のみならず教室の担当領域へ関心をあげられ、さらに卒前の教育、教室運営のための数々のお仕事に加わり、大変多忙な時期を過ごしてこられました。

北海道大学医学部では、隣同志の内科教室に所属致しておりました。当時から先生の温容は変わらず、御所属の第二内科はもちろん、広く医学部・病院の同僚・先輩の信頼を得ておられました。

弘前大学の武部教授は、本学開設時の内科学第二講座助教として、苦勞を共にした仲間という記憶があります。武部教授の指導を受けられた牧野教授とともに、まさに発展期の本学をもり立てて行けるのはまことに幸いと考える次第です。

今後の牧野教授の御活躍、内科学第二講座の御発展を心から祈り上げるものです。

教授就任にあたって

内科学第二講座

牧野 勲



本年8月16日、石井兼典名誉教授の停年御退官後の内科学第2講座の後任として着任し、2ヶ月余を経過しました。私は自然環境に恵まれた素晴らしい旭川医大で仕事をさせていただくことを光栄に思っておりますが、その一方、責任の重大さを痛感致して居ります。微力ではありますが、全力を傾倒し、当教室の発展に尽したいと念願しております。

臨床内科教室の果すべき役割りは研究・診療および教育であると思っております。御承知のごとく最近の内科学の進歩は著しく、内科医はそれらの先進医療に対し、対応することが要求されていますが、その一方、自分の専門に過度にかたよることなく、出来るだけ広範な知識と技術を修得することも重要であります。第2内科は既に肝、胆、膵各疾患の他、糖尿病、内分泌などの代謝疾患について豊富な実績を有しますので、私は協調と努力により臨床の環境を整備しつつ、堅実な積み重ねを行っていきたくと考えております。

また内科教室における研究は臨床に密接したオリジナルなもので、結果を臨床の場にフィードバック出来るものが望ましいと考えます。それには教室の各種分析器材を整備して研究に取り組み易い環境を作る一方、個々の研究者は最近の研究動向と分析手法に精通し、腰をすえた粘り強い研究態度が不可欠だと思っております。今後は研究体制の整備状況を見ながら、研究分野の拡張を考慮し、さらには他大学の関連方面の専門家と共同研究を行いたいと考えて居ります。

臨床医学における教育はその多くを診療の場に求めることとなりますが、私は第2内科における実践臨床を活用し教育効果が上がるよう努力したいと思っております。

私の研究テーマでありますが、当初(北大時代)は肝胆道疾患における胆汁酸代謝について病態解析を行いました。その成果は現在臨床で活用されておりますウルソデオキシコール酸胆汁石溶解療法の開発や肝機能検査としての血中胆汁酸測定に役立ちました。その後転出しました弘前大学では内分泌、糖尿病、神経系、感染症各疾患の診療、研究、教育に従事しましたが、青森県には北海道で見ることが出来なかった疾患も多く、私にとりましては良い経験となりました。そこでの主な研究には糖尿病合併症の諸問題、MRIによる下垂体疾患の解析、微量重金属代謝、各種ホルモンのRIA確立、抗生物質の副作用などがあります。私は昭和44年から2年間スウェーデン王立カロリンスカ研究所(ノーベル賞生理医学部門を決定する機関)に留学しました。その際培われた生化学面の知識は現在でも非常に役立っておりますが、それ以上に人間としての視野を広げることが出来たことを幸せに思っております。それで後輩には機会があるごとに海外留学を強くすすめ、その重要性を常に述べて居ります。以上御挨拶少々私の研究略歴を述べさせていただきました。今後よろしく御指導、御鞭撻下さいませようお願い申し上げます。

田中剛先生の赴任によせて

哲学 教授 岡田 雅勝

去る8月1日にドイツ語の助教授として田中剛先生が発令になりました。まず最初に、先生を心からお迎え致したいと存じます。

先生はこちらに来られる前に北海道大学文学部独文学講座の助手をされていた(北海学園大学などでドイツ語の非常勤講師などもされていた)が、ここに先生を御紹介致したいと思います。

先生は、生まれは芦別で純粋の道産子です。慶応大学文学部独文科を昭和50年に卒業され、民間企業に入りましたが、ドイツ文学研究への意志を強くされ、間もなく北海道大学文学部で研究生になり、その後北海道大学大学院に入られ、修士課程並びに博士課程でドイツ文学研究を専攻されました。その間文部省学生国際交流制度の学生国際交流に推薦され、西ドイツのミュンヘン大学の文学部に留学され、ドイツ文学の研究をされてきました。

先生のドイツ文学研究は、慶応ではフリードリヒ・シュレーゲルの〈イロニーの概念〉を扱い、解釈学的文学論を、北大ではトーマス・マンの長編小説『魔の山』に取り組みられ、その後現代ドイツ文学の第一人者で、最も問題のはらんだ作家として知られるギュンター・グラスに取り組みました。グラスにはダンツィヒ三部作として知られる長編小説『ブリキの太鼓』『犬の年』『猫と鼠』がありますが、先生はこの大作に真正面から取り組み、それを解釈学的文学理論(シュレーゲルの解釈学的文学論に始まることとされている文学理論で、ガーダマーやリクールのなどの解釈学や英文学理論の影響を受けた、ヤウスやイーザーなどが展開している文学理論)の基礎的研究に立って、受容的解釈学的理論を踏まえてグラスの作品の分析を試みた論文を発表され、独文学会で高い評価を受けています。

総じて先生の研究はしっかりとした基礎的研究に支えられており、粘り強い意志力と用意周到で正確な読解力でもって研究にあたられている有様がよく推敲された論文から伺われます。また先生はドイツ語を学び、ドイツ文学を研究するのに大変恵まれた環境(例えば、優れた独文研究者やドイツ人教師に学んだこと、ドイツへの留学、優れた研究者との研究交流など)にありました。ですから、ドイツ語教師として、また独文研究者としてその素養と実力を十二分にもちあわせていますし、それをこの大学で存分に発揮されるものと信じます。

先生は高校時代まで野球部に所属して選手として活躍されましたが、夏は野球を冬はスキーとスケートをされるスポーツマンでもあります。また自らギターを奏でる音楽愛好者でもあります。先生は、篤実で穏和な人柄ですが、また芯の強い情熱的な方でもあります。ですから、先生は多くの学生と親しく交わり、そしてよき教育者として学生を導いてくれるに違いありません。

助教授就任にあたって

ドイツ語

田中 剛



本学創立時より多年にわたりドイツ語教育にご尽力された丸子基夫先生の後任として、浅学な私が当地へ赴任しましてから既に3ヶ月経過しました。高邁にして豪放、

さらに気品すら感じさせる大雪山連峰、進取の気概に富んだ若々しい校風、私はまず何よりもこのような恵まれた環境のなかで教育実践・研究活動ができることに感激を致しました。ドイツ語の専任は私一人であることに重責の念を日々新たにしつつ、今や張り切って歩み始めたところです。

私とドイツ語との関わりは、東京、札幌と移動はありましたが、ほぼ20年近くになります。自己紹介も兼ね取って回顧調で申しますと、かつて志抱いて上京しましたときは、あの学園紛争の余韻未だ色濃く残り、それが免疫をもたぬ私を戸惑わせました。時代の真空状態のなかに私も呑みこまれたような気分でした。私は大学に足を運ぶものの大半の時間を学内の図書館にこもり、文学・語学に限らず様々な書物を乱読しました。今では、この時代が私の精神的土壌を耕してくれたのだと思えますが、当時は自覚などなく、試行錯誤に明け暮れていたというのが本当でしょう。かくてドイツ語の原書をいつも傍らに置き、暇さえあれば一行でも二行でも読む習慣がついてしまいました。現在の私にとって、ドイツ語は井戸の瓶であり、またそれを通じてドイツ語・文学の地下水脈に至る井戸そのものでもあります。当時はこの言語を研究対象にしようなどとは全く考えていませんでした。しかし、いつのまにかこの井戸のなかに自ら落ちていました。こうなると初めてこの分野と真剣に渡り合おうと思った次第です。

大学院では、主としてドイツ20世紀文学・近代文芸理論・ドイツ語学(統語論、意味論、語用論)を勉強しました。トーマス・マン、ヴァルター・ベンヤミン、フリードリヒ・シュレーゲル、ギュンター・グラスという作家・批評家の系列のなかに共通の解釈学的紐帯を見出し、それが具体的に文学作品分析に際しどのように適用され得るかの研究、作品内在的批評・解釈の限界を克服しようとする受容理論の研究、並びに経験主義的コミュニケーションシステムに依拠した作用理論の研究等を現在も続行中です。要するに、作品と読者との対話という自明性を問い直す作業です。

さて、ドイツ文学の諸作品を味読するためには、ドイツ語に対する絶えざる反省が要求されますが、これは比較的平易に思われがちな基礎的文法知識・ドイツ語会話についても当てはまります。後者はいわば瓶であり、井戸と水脈(あるいは文化的価値)への認識を伴ってこそ生きてくるからです。その意味で向学心に燃えた学生諸氏とやがてドイツ語で書かれた原書を読破し、ドイツ語で語り合うという場面が実現したらどんなに素晴らしいだろうと、少々先走ったことなど思う昨今です。最後に好きな言葉の一つ挙げます—Wir wissen nur insoweit wir machen.

昭和63年度通学方法・ 居住状況調査結果一覧

昭和63年度通学方法・居住状況アンケートをまとめましたので掲載します。

(学生課)

昭和63年6月1日現在

アンケート提出数 () は女子・内数

学 年	学 年						大 学 院					
	1	2	3	4	5	6	計	1	2	3	4	計
在籍学生数	133 (36)	131 (25)	120 (27)	121 (25)	128 (22)	123 (16)	756 (151)	8	20 (4)	13 (1)	17 (1)	58 (5)
アンケート提出数	65 (21)	91 (19)	78 (23)	90 (20)	100 (20)	64 (9)	488 (112)	3	11 (2)	8 (1)	7 (1)	29 (3)
提出率(%)	48.9	69.5	65.0	74.4	78.1	52.0	64.6	37.5	55.0	61.5	41.2	50.0

通学方法のまとめ

方法	学 年						大 学 院						
	1	2	3	4	5	6	計(%)	1	2	3	4	計(%)	
徒 歩	28 (10)	8 (5)	14 (5)	14 (1)	10 (3)	8 (1)	82 (25)	16.8 (22.3)	1		1	2	6.9
自 転 車	24 (8)	46 (10)	23 (8)	19 (3)	24 (5)	9 (1)	145 (30.4)	29.7 (38.4)					
バ ス	8 (3)		4 (2)	1		1 (1)	14 (6)	2.9 (5.4)					
バイク	任意加入	2	6	3	7	6	1	25 (5.1)					
	非加入	1	1	5	6	3	3	19 (3.9)		1		1	3.4
自動車	任意加入	1	23	24	33	48	36	165 (33.8)	2	11	6	7	26 (89.7)
	非加入		1	2		1		4 (0.8)					0.9
自動車相乗	1	6	3	10	8	6	34	7.0 (15.2)					
そ の 他													
計	65 (21)	91 (19)	78 (23)	90 (20)	100 (20)	64 (9)	488 (112)		3 (2)	11 (1)	8 (1)	7 (3)	29

居住状況のまとめ

形態	学 年						大 学 院						
	1	2	3	4	5	6	計(%)	1	2	3	4	計(%)	
自 宅	9 (3)	13 (4)	13 (4)	6 (1)	15 (6)	12 (3)	68 (17)	13.9 (15.2)	2	1	2	1	6 (20.7)
親 戚 又 は 知 人 宅	1				1	1	3	0.6		1 (1)		1 (1)	3.4 (33.3)
下 宿	26 (8)	26 (1)	22 (2)	29 (2)	17	10	130 (13)	26.6 (11.6)					
間 借 アパート	30 (13)	49 (14)	41 (16)	54 (17)	65 (13)	41 (6)	280 (79)	57.4 (70.5)	1	9 (1)	6 (1)	5 (2)	21 (66.7)
借 家	1 (1)	2 (1)	1	2	1	2	6 (3)	1.2 (2.7)			1	1	3.4
道 営 市 営 住 宅		1					1	0.2					
計	65 (21)	91 (19)	78 (23)	90 (20)	100 (20)	64 (9)	488 (112)		3 (2)	11 (1)	8 (1)	7 (3)	29

居住状況内訳

居住状況	学 年						計	大 学 院				
	1	2	3	4	5	6		1	2	3	4	計
自 宅	9	13 (3)	13 (4)	6 (1)	15 (6)	12 (3)	68 (17)	2	1	2	1	6
親戚又は知人宅										1 (1)		1 (1)
下 宿	~40,000											
	~45,000											
	~50,000											
	50,001~											
	計											
宿 舎	~40,000		2	1	1							4
	~45,000	1	3	3 (2)	5 (1)	5	4	21 (3)				
	~50,000	15 (5)	9	9	8	6	2	49 (5)				
	50,001~	1	3	3	4	3		14				
	計											
(光熱水料込)	~45,000		3	2	2	1	2	10				
	~50,000	2	1 (1)		5 (1)			8 (2)				
	~55,000	1 (1)		1	2			4 (1)				
	55,001~		2	3				5				
	計											
間 借	~45,000											
	~50,000	2				1	1	4 (1)				
	~55,000	1			1			2				
	55,001~	4 (1)	3		1	1	1	10 (1)				
	計											
借 家	~20,000					2		2				
	~30,000	1	2	1	1	1	1	7 (1)				
	~40,000											
	40,001~											
	計											
ア パ ー ト	~20,000											
	~30,000	4 (2)	8 (4)	9 (4)	5	12 (1)	10	48 (11)			1	1
	~40,000	13 (7)	26 (6)	21 (11)	24 (8)	17 (5)	5	106 (37)				
	40,001~	1	1	2	1	1		6 (1)			1	1
	計											
バ ー ー	~20,000											
	~30,000	2	1	1		4	1	9 (2)				1
	~40,000	7 (1)	7 (2)	5	10 (5)	20 (5)	15 (3)	63 (16)			1	2
	40,001~	1			2 (1)	2 (1)	5 (2)	12 (3)			1	2
	計											
ト ー ン	~20,000											
	~30,000											
	~40,000		3 (1)		5 (2)	4	4	16 (4)			2	1
	40,001~	2 (1)	1	1	1	3	2	10 (2)			2	2
	計											
借 家	~20,000											
	~30,000											
	~40,000		1 (1)					1 (1)				
	40,001~											
	計											
道 営 市 営 住 宅	~20,000											
	~30,000											
	~40,000											
	40,001~											
	計											
道 営 市 営 住 宅	1											

研究室紹介

■ 解剖学第二講座 ■ 加地 隆

当研究室は、形態・構造を計量化して変化を調べるといふユニークな方法を最初から一貫して用い、脳内の謎の器官「松果体」の構造と機能・医学的意義の解明と取組んでおり、松果体研究の国際的競争と協調において形態学の分野では何とか先頭集団の中でやって来たと自負している。松嶋教授は松果体の電子顕微鏡的研究の草分けの一人で、著書も多く、最近ではポーランド電顕学会から招かれて特別講演を行う等、その名は世界にあまり知られていない。赴任以来15年の歳月が流れ、教授・助教と共に外観に変わりがないとはさすがに言いかねるが、松果体の謎の解明に向けて内に燃えるものには変りがない。この間、ささやかな研究室ながらも本学卒業生の相田助手と早坂助手（放射線科）が教授の厳格な指導の下、当研究室伝統のげっ歯類松果体の生後発育、特にその計量的電顕的研究により、素晴らしいスピードで業績を挙げ、学位を取得した事は喜ばしい事であった。親しまれ惜しまれて去った相田助手の後をうけ、大器 平義樹助手を迎える事が出来た事は前途に光明を見る思いであり、形態の数学的シュールベルト的解析という彼の夢がいつか実を結ぶ事を祈っている。阪井（旧姓森沢）助手は良き研究者・教官・妻たるべく健気な努力を続けており、東崎事務官も変らぬ落ち着いた態度としっかりした仕事振りで、二人共ゆるぎない信頼を集めている。又臨床からの河井助手・辻研究生はげっ歯類松果体の形態学的研究を中心に熱心に勉強している。私は他科からの協力も得て松果体の自律系に対する作用やヒトの松果体で腫瘍・神経難病・法医学との関連等を中心に研究中で、国際シンポジウムで発表する等頑張っている。

松果体の研究は今激動の時期を迎えている。国際集會が頻繁に開かれ、国際雑誌 *Journal of Pineal Research* も今年第5巻（1～6号）が発行され、この約10年間を見ても、分化・老化・バイオリズム・腫瘍との関連・メラトニン受容体等々重要な発見が相次ぎ、新しい研究の波は動物からヒトへと次第に拡がりつつある。松果体の本態の理解はこれからの10～20年間で劇的に進展する情勢にあり、我々もこの劇に役演ずるべく懸命に研究を続けている。松果体や副腎髄質等の内分泌器、脳、自律神経、バイオリズムや形態学一般に興味がおありの方は是非当研究室へ。女性の方も是非、是非。熱心でネバリ強さに自信のある方は是非、是非、是非、委細面談にて。

（解剖学第二講座 助教授）

体育大会

学生主催の体育大会が、9月7日(水)に開催された。参加学生は学年対抗・有志対抗の各々の種目に善戦を繰り広げた。

結果は次のとおり。

	1 位	2 位
〈学年対抗〉		
総合	4 年	5 年
サッカー	4 年	5 年
バスケット	4 年	2 年
綱ひき	3・4年(引分け)	
リレー	4 年	
玉入れ	5 年	4 年
〈有志対抗〉		
バレー	ネオ末広荘	スキー部A
ソフトボール	スキー部C	軟庭アップルズ

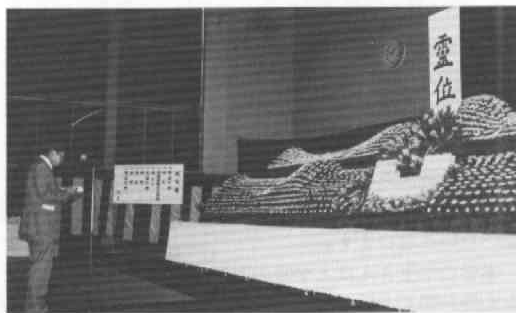


解剖体慰霊式

昭和63年度解剖体慰霊式は、9月21日(水)午後1時30分から本学体育館において執り行われました。

式に参会した御遺族・御来賓・本学教職員・学生は、本学の教育及び学術研究のために尊い御遺体を提供され、医学発展の礎石となられた132名（病理解剖54名、法医解剖50名、系統解剖28名）の方がたの御遺徳を偲び御冥福を祈念しました。

（学生課）



新入生研修(第2回目)

新入生研修(第2回目)が、10月27日(木)・28日(金)・31日(月)・11月1日(火)に行われました。

研修は、第1学年全員を8グループに分け、1日2グループずつ行い、1グループに教授2名(一般教育1名、基礎・臨床1名)が指導にあたり、①前期試験終了後における就学上の問題、②学生生活上の問題などを中心に懇談が行われた。

(学生課)



窓外

山村晃太郎

赴任6度目の秋、遅い今年の夏が過ぎたと思ったところ一気に虫の鳴き声と夜風の寒さが迫り、毎年旭川の気候の変わり目の急速なことには驚かされます。

居室の窓外には大雪連峰は依然として美しく、またキャンパスの樹木も2年前から手入れの故か緑が濃くなってきたのが眺められます。

さて、旭川の気象の変化の激しさは本州と比較するまでもなく、道南地方、小生の郷里の函館と比較してもやはり際立つ特徴かと思えます。短い春、夏、秋と長い冬。しかし、この冬の厳しさも昔と比較すると大分暖かくなったのだとお年寄には聞かれます。

もっとも、この気候こそが、かつて男子の心身を鍛えたのかも知れません。旭川師団、通称“熊部隊”は当時日本最強の軍隊であったと聞いています。

また、この気象条件が特別に高血圧その他循環器疾患の多発に関与するかということ、どうもその様ではないと考えられます。北欧やカナダなどの日常生活と比較してみても毛皮が必需品という程でもなく、また時に高カロリーの食料が要求されるということもありません。

この澄んだ冷涼な空気の下では、かえって精神活動には良いのではないかと自分なりに思っています。小生も停年まで10年余、成果があるあがらないは別として、自分で実験することを通じて参りたいと思っています。さて、この研究ということについて多少の感想を以下に述べたいと思います。

本学の学生さんは入学時の面接の際に、本学を志望した動機を聞くと異口同音に道北圏の地域医療に励みたい

と、あたかも北のシュバイツアーの様な意見を述べます。それが入学して学年が進むと段々と変わり、中都市以上の市立病院の医長さんになりたいという希望になります。これは堅実な中産市民になりたいという願望ですから、君子豹変と決めつける訳にもゆかないのでしょう。しかし毎年120人卒業生の中からやはり1人か2人位、北海道の熊の様なタフで、野心に燃えた青年があらわれてもいるのではないかと思います。

医学博士をとったところで、ほうほうの態で研究生生活から足を洗ってしまうのは残念なことで、実はそこから本格的な研究生生活が始まるのです。①ポストがないからというのは言い訳でポストクのコースなら海外に口はあるでしょうし、また大学でなくとも東京における官庁や大企業の研究所は設備、人、その他一流大学の研究室に匹敵します。②先輩がいないため風当たりが強くなってつらいというのも言い訳です。東京の施設は色々な大学卒業生が集中しているので、一種の混成チームの態となっているので、頑張って成果を人に認めさせれば、ある学校だからといって先入感をもってみません。そのかわり無能と思われたら相手にされません。だからこの旭川が狭くてはみ出るようなハイボルテージの青年が1期に1~2人出現することを望みます。

朝晩澄んだ大雪連山をみるにつけ、こんな希望をもって学生さんをみています。

(衛生学講座 教授)

